

## 平成 29 年度自然保護常任研修会報告

会期 平成 29 年 6 月 17 日～18 日（1 泊 2 日）

場所 神奈川県足柄郡 21 世紀の森 研修室（宿泊 洒水の滝・文覚荘）

参加 常任委員及び所属都県自然保護委員 32 名

（茨城 2、栃木 6 名、埼玉 7、千葉 1、東京 9、神奈川 6、長野 1）

概要 神奈川県立 21 世紀の森及びその周辺にて、平成 29 年度自然保護常任研修会を開催した。一帯は神奈川県西部で足柄平野を前面臨む箱根外輪山の東側にあつて、「大雄山最乗寺の天狗」の伝説と、美林を誇る山林域として著名である。この地の民俗伝承と森林についての学習を通して、山岳自然保護を考えることを今回の目的とした。研修会には常任委員と関東地区の山岳連盟の自然保護委員の 32 名が集つた。

第一日目はイラストレーターのとよだ時氏を招き「山岳と天狗信仰」について、紅葉淳一常任委員から「足柄の森林について」約 2 時間のレクチャー、林内の散策を行った。

（とよだ時 氏のレクチャー概要）

とよだ氏は「日本百霊山・伝承と神話でたどる日本人の心の山」と題した著述をヤマケイ新書からだされており、このほか天狗を題材にしたイラストを取り入れた興味溢れる著述をされている。今回、「大雄山最乗寺」の天狗に因み、各地の山岳などにおける天狗の伝承話を聞いた。

古来、有名な霊峰には天狗が住んでいたとされ、富士山の「太郎坊」、筑波山の「法印坊」、大山（だいせん）の「伯耆坊」・・・と天狗様に名前がついている。丹沢（相模）大山（おおやま）も同じ大山伯耆坊の名が伝わっており、相模大山の相模坊（最乗寺の天狗のこと）が崇徳上皇の霊を慰めるために四国の白峯に行ってしまったために、伯耆から相模に移り住んだという。

天狗にも階位があつて「大天狗（鼻たか天狗）」「小天狗（からす天狗、木の葉天狗）」「狗賓（ぐひん）」など。大天狗の一般的な姿は修験者の様相で、その顔は赤く、鼻が高い、憤怒の形相、翼があり空中を飛翔する。民間信仰において神とも魔物ともされる超能力（神通力）を備えた伝説上の存在。また女性の天狗を「尼天狗（女天狗）」と呼ばれる。時代を経て、天狗信仰は、やがて山岳自然の中で艱難辛苦の修行を行う修験道と習合して、天狗は修験者や山の自然を守る神様だと思われるようになった。

明日巡る予定の大雄山最乗寺の天狗(大天狗)は、修験道の満位の行者 相模坊道了尊者として、道了大薩埵（ダイサッタ）との高德の僧をたたえて付ける尊称が与えられ、諸願成就の尊崇を集めている。山岳とその自然が持つ神秘的な雰囲気や底知れぬ脅威から、その存在を天狗伝説に投影した古代人の発想力の凄さに驚くものである。

（紅葉淳一委員のレクチャー概要）

元神奈川県の林業職であつた委員から、足柄林業地の実情について話を聞いた。

この地一帯は足柄林業地として、神奈川県を代表するもので明治 29 年から本格的な造林が行われてきた。荒山が目立つ各地の造林地が通例であるが、この地は比較的によく植えられ、良く育っている。足

柄林業地は東西7km、南北12kmに及びスギ・ヒノキ・クロマツが分布する。かつては農耕用に採草や薪炭採取で全山草生原野であったところ、造林によって森林を取り戻し用材林化が進んだ。行われている施業は短伐期型で小丸太・中丸太の量産林業となっている。

一方、大雄山最乗寺の寺社林も抱えており、樹齢400～500年の老スギが県指定天然記念物として鬱蒼と茂り、寺社の建物を納めている。山林面積は約100ヘクタールを占める。

第二日目 当初、明神岳の登山であったところ、雨天の兆しがあったことからコース変更し、「あしがら森林公園・丸太の森」整備された人工林と大雄山最上寺奥の院周辺の寺社林を巡検した。

「丸太の森」は大雄山最乗寺の寺社林に隣接して、24万平方メートルのよく整備されたスギ林を1時間ほど散策し、紅葉委員から森林施業について説明を受けた。そのあと大雄山最乗寺に向かい、道了大薩埵の社を拝み、寺社林の老木林のなかと350段余り急階段にあえぎながら奥之院を巡った。

下山後、門前のそば屋「十八丁目茶屋」でトコロ蕎麦の昼食を摂り、三々五々夫々の帰途に就いた。

